

(16)

《 翻 訳 》

「南山紀要」黄平，李陀ほか ——中国知識人の環境に関する共同提案——

(お茶の水女子大学) 宮尾 正樹他

解題

昨年11月に、中国社会科学院副院長で雑誌『讀書』の編集長でもある黄平氏が、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターにおいて「ジェンダーと女性——グローバル化の中で」と題する講演を行った。その際に参考資料として、同氏が執筆者の1人である「南山紀要」の日本語訳を参加者に配布した。より広く中国研究者にこの文章を紹介する意味があると考え、このたび『中国研究月報』に掲載させていただくこととした。

本論文は海南省作家協会の雑誌『天涯』2000年第1期に掲載されたものである。同誌は韓少功が作家協会を引き継いでから面目を一新し、李陀や黄平を編集に迎え、「新左派」の人々の文章を多く載せている。「新左派」と「新自由派」の論争の口火を切ることとなった汪暉の「論当代中国的思想状況以及現代性問題」(邦訳「グローバル化の中の中国の自己変革をめざして」『世界』1998年10月号)も同誌に掲載されたものである。

本論文は1999年10月に海南省三亜市南山で開かれた座談会の議論をまとめたものである。『天涯』副主編の李少君が記録整理したものに、一部の参加者が補充修正を加えたものだという。この座談会は『天涯』編集部が中国内外の40数名を招いて開いたもので、環境、エコロジーの問題を中心に活発な討論が交わされた。それを整理したこの文章は、環境問題を発展主義イデオロギー批判の立場から論じたもので、座談会で司会を務めた韓少功が「世紀の変わり目における重要な産物」(「我与《天涯》」)と自ら評価するように、大変力強い重要な文献であると思われる。

なお、原文は『天涯』のホームページ(<http://www.tianya.com.cn>)から読むことができる。「南山紀要：我們為什麼要談環境—生態?」『天涯』2000年第1期。宮尾正樹，鈴木直子，田川めぐみ，赤松美和子訳。

南山紀要

我々はなぜ環境—生態を語るのか?

前言

1999年10月下旬、海南省作家協会主催、南方航空海南支社協賛の「生態と文学」国際シンポジウムが海南省で開かれ、中国及び、米、仏、豪、韓国の作家や研究者、張煒、李銳、蘇童、葉兆言、格非、ウロルト、方方、遲子建、蔣韻、黄燦然、蔣子丹ら30余名が参加した。25日夜、三亜市南山の生態文化苑で、小異を残して大同につくという原則の下に、環境—生態問題についてさらに座談会を行った。参加者は黄平、李陀、陳燕谷、戴錦華、王曉明、陳思和、南帆、王鴻生、耿占春らである。韓少功が司会者として出席した。シンポジウムに参加した他のメンバーや外国の研究者も列席した。ここに示すのは、参会者の発言と考え方の概要であり、思考を継続し広範なる批評を求めるための基礎とするものである。

環境—生態問題は決して科学技術だけの問題ではない。

ずいぶん長いこと、世界の環境—生態は悪化し続けている。水資源の枯渇、砂漠化の拡大、温室効果、有害ガス排出量の激増、オゾン層の破壊、生物の多様性の現象等々。それらは人類やその他の生物種の物質的生存に危害を及ぼしているばかり

りでなく、経済、社会、政治、文化及び民族の衝突ないしは危機を激化させている。

中国のような、一人当たりの物質資源が相対的に不足している発展途上国においては（世界で160位以下である）、世界の経済システムと「リンク」する歩調が速まるにつれ、資源と成長との矛盾、生態—環境と経済成長との矛盾が急速に激しく、また顕著になってきている。近年黄河の河水が枯渇し、長江が氾濫し、淮河が黒変し、西北地域などで急速に砂漠化が進み、華東、華南などの大気汚染や水質汚濁が悪化し、多くの人々の最も基本的な生存条件に危害が加えられ、生存権が剥奪されている。都市のゴミ公害と食品汚染も人間（特に給与生活者と貧困層）の生命や健康と生活水準に対する脅威となっている。中国の国家関係部門の統計によれば、中国では今や30%の水資源が汚染され、33%の耕地が水土流失の危害を受けており、毎年環境汚染により生ずる損失は1000億元に達するといひ、国民総生産（GNP）の6.75%を占める。これは環境—生態の代価が経済成長のほとんどを相殺することを意味する。全体的に見て、河川湖沼の水不足、水質と大気の汚染、土壌の劣化、耕地の減少、表土流失、酸性雨の増加の現象は有効な対策をされていない。

以下のような見方がはやっている。環境汚染と生態破壊は経済成長と社会発展の過程において不可避の段階的な現象であり、時間の推移と科学技術水準の向上によって次第に解決されるであろうし、成長、発展が実現した後にはじめて環境と生態保護に対してもより多くの財力を投入できる。

この見方に対しては以下のように問いかけるべきである。過去数十年の状況から見て、世界は決して環境—生態に必要な保護を与えるための基本的な科学技術を持たないわけではなく、全世界の資金も水質の広汎な汚染や工業による大気汚染のような問題を解決するのに十分であるのに、環境—生態の悪化は一段と加速している。これは、環

境—生態破壊の背後により深刻な社会—政治的、文化的原因が潜んでおり、環境—生態問題が科学技術の問題だけではないということを示す。

現在世界の多くの地域で水資源の不足が深刻化しているが、こうした水不足の深刻な地域においてさえ、依然として土木事業がブームである。高級ホテルやオフィスビルが次々と建設され、三ツ星ホテルのスタンダードルームの給水設計はなんと毎日1トンであるという。これを一まとめに水不足と言うことに意味があるだろうか。世界人口の5%に満たないアメリカが、全世界の1年当たりの開発エネルギーの34%を毎年消費し、世界人口の20%未満を占めるにすぎない先進国が世界のエネルギーの80%を毎年消費している。一方で、アメリカは自国の産業利益を守るため、現在も地球の大気を保護する国際協定の批准を拒んでいる。それでも漠然と大気汚染を解決しなければと言うことに意味があるだろうか。いったいすべての人が水不足に困り、大気を汚染しているのか、それとも一部分の人が水不足であり、大気を汚染しているのか。どの一部分の人が水不足で、大気を汚染しているのか。水不足や大気汚染といった問題は科学技術だけの問題だろうか。科学技術だけで解決することができるのだろうか。

本質的には、環境—生態問題は自然資源の占有、利用、分配のあり方についての問題であり、この占有、利用、分配は常に特定の社会システム、社会制度、社会イデオロギー下において発生し展開するものである。こうした社会領域と社会過程に対する関心、反省、批評は、人文科学者及び社会科学者、作家、芸術家と市民的知識人が回避してはならぬ責任なのである。

発展主義のイデオロギー

環境—生態と発展の問題はしばしば二項対立的な難題とされる。発展しようとするれば、環境—生態を破壊し、環境—生態を保護しようとするれば、

発展を犠牲にして貧窮に耐えるしかないかのようなものである。こうした発展主義の思考方式と流行の言説は多くの人の中である種の常識あるいはコンセンサスとして内面化しており、人々が発展と環境—生態の問題に対して積極的意義をもつまじめな検討をすることを妨げている。

環境—生態問題に関心を払うことは、けっして極端な環境—生態主義神話に追従することではないし、あらゆる生命（ウイルスさえ含む）とあらゆる自然物（洪水も含めて）をすべて崇拝し保護しなければならないというような現代の汎神論を打ち立てることでもなく、また、工業文明、農業文明及びそれ以前のその他の文明形式と自然界との間に確かに存在してきた衝突関係を否定もしないし、人々が日々快適になる物質生活を求める合理性を否定もしない。だが、人と自然とが相対的に調和し、経済発展と環境—生態保護とが相対的に平衡を保つことも、「快適」の語の持つべき意味に含まれるのではないだろうか。しかも、こうした相対的調和と相対的平衡は歴史上けっして珍しいことではなく、現実の生活においても多くの相対的成功の範例がある。今日、海南省や雲南省、あるいは山西、江西などでも、ところによっては、発展と環境—生態との間に良性の循環があり、住民の福祉が向上している活発な事例をたくさん見出すことができる。各種の文明形式と自然の衝突がかつて起こったということは、今日における環境—生態の悪化を傍観する態度の正当性や必然性を説明するものではまったくない。そして、発展と環境—生態を二者択一的な関係としてとらえることは、通常の下況下では、略奪的で破壊的な開発への弁護にしかすぎない。

大規模で急速な環境—生態悪化の趨勢はけっして歴史上の常態ではなく、この1, 2世紀のこと、特に第二次大戦以後の現象であり、世界的な発展主義思潮と体制的な開発とがもたらした結果である。ここで言う発展主義は発展とは異なる概念で

ある。普通の意味の発展とは、物質生産水準の向上と生活の質の改善を指し、各地で生活する人々の正当な要求であり、中国の改革と建設の目標でもある。一方、いわゆる発展主義（厳密に言えば開発主義）とは、西欧北米の特定の制度環境に由来し、60年代以降次第に拡張し、国際的組織が鼓吹し、後発社会が奉ることとなった近代化言説とそのイデオロギーを指す。それは工業化、都市化、近代化等に対する承認を通じて、広大な「第三世界」に、貧富の拡大、環境—生態の悪化等を含めて極めて深刻な影響を与えた。冷戦終結後、発展主義はグローバル化の潮流へと変化した。この潮流は発展を単純に経済成長に還元し、経済成長をこれまた単純にGDPあるいは一人当たりの所得の向上と同一視する。それはすべての人に未来の「美しき生活」を約束するのと引き替えに、不均衡な経済構造と不合理な交換—分配システムを生み出し、資源が減少しつづける環境を破壊し、すでに十分脆弱になっている生態系を傷つける。

発展主義イデオロギーは環境—生態問題を無視し、環境コスト、健康コスト等は企業の内部のコスト—利益分析から除外する。それはまた人間同士の協調や社会的統合の問題も無視して、社会の倫理、信義、安全、情誼、団結、互助といった社会の維持と継続のための基礎を崩壊させ続ける。発展主義の言説は一種の唯物質主義、唯発展主義であり、唯GDP主義ということさえできる。

こうした発展主義の言説には多くの盲点が存在する。例えば成長に関する統計は人類生存の真相をしばしば覆い隠す。大量に森林を伐採し、木製家具、パルプ、使い捨ての箸等を生産して製材業と市場の需要を満たすとGDPは引き上げられるが、その生産過程における環境破壊（パルプ製造過程の河川に対する汚染、材木の減少により引き起こされる水土流出、大気汚染等）は、GDPから差し引かれることはない。さらに皮肉なことに、健康を守るために人々はミネラルウォーターを買わね

ばならず(金持ち,あるいは中産階級は新鮮な空気を吸うために,飛行機に乗って遠くに旅行までしなければならない),ミネラルウォーターの購入やバカンスの消費がさらにGDPを増加させるのである。1回の破壊がGDPを2度上昇させる。「美しき生活」はこのようにして再生産されるのだ!

国民総生産(GNP),国内総生産(GDP),平均所得などは社会全体の収益を考える際に必要な概念であるが,こうした統計が社会の進歩の唯一の指標となるならば,莫大な環境—生態コストや社会—倫理コストは隠蔽される。しかもこうした統計は,成長や開発による主たる受益者がどれほどいて,それがどのような人間であるのか,主たる代価の負担者がどれほどいて,それがどのような人間なのかということを示し出すことはできない。このように金銭で価値を測る方法は,貨幣流通過程にカウントされない労働(例えば家事労働,ボランティア,助け合いや自給自足の農業労働等)やその他の代価(環境—生態破壊,健康,安全,尊厳,信頼の損失等)をどうしても統計の範囲から除外するので,成長下の不均衡,不協調,不正と不合理をしばしば覆い隠してしまう。

成長主義と金銭至上の発展主義イデオロギーは,欧州啓蒙時代の人類中心主義,唯科学主義及び歴史決定論に思想上の淵源をもち,第二次世界大戦以後の資本主義経済システムの新たな地球的拡張の産物でもある。先進国主導の国際機構(たとえばIMF)の発展主義の青写真の下で,少数の国家あるいは地域(日本やアジアの「四小虎」〔四小龍か—訳者〕のように)が,戦後の複雑な政治—軍事—経済—技術—文化の総合要因により比較的急速な成長を実現し,それがその他の発展途上国の手本として描かれた。しかし,以下の事実は否定することができない。戦後,発展主義モデルとそれに関連した制度—技術を受け入れた多数の国家と地域では,発展主義が約束したような発展が起こってはいないし,成長と同時に重い社

会—政治と環境—生態の代価を支払わされ,ますます苦境に陥っている所さえある。

国連開発計画(UNDP)『人間開発報告書1999』(The Human Development Report)は,およそ40カ国の経済が10年前よりも悪化しており,アフリカ,南アジア,ラテンアメリカ,さらに以前の超大国ロシア等は深刻な危機に直面していると述べている。冷戦時期の政治的援助等の要素を考慮しないとしても,「四小虎」の成功とこの40カ国の不成功は,世界の発展主義のうねりの中での不均衡と排他性を十分に示すものだ。事実,発展主義は包容力の強いものではなく,排除性の強いジャンルなのであり,貧富の差の問題を解決できず,格差をさらに広げるだけである。同様に,環境—生態問題も解決できず,より広い範囲におけるいっそう深刻な環境—生態問題をもたらす。このことは発展主義自体の「利潤の最大化」の一方的な追求と,そこに内在する「勝者がすべてとる」という論理ゆえに宿命的なのである。

発展主義がやってきたところでは,より多くの自然物が発展主義の体制と言説の下での「資源」と化す。いったんこうした資源としての価値を具えれば,これらの自然物は急速に商品化され市場化され,その過程で,ローカルな,あるいはグローバルな様々な資本—技術の依存関係を通じてますます各種の権力集団と資本集団の手中に集中されていく。権力の独占と資本の拡張のシステムの下で,こうした集団は常にこれらの資源によって自己あるいは一部分の人々の利益要求を満足させ,大部分の人は資源消費と環境破壊といった災難を引き受けることになるのだ。

このプロセスは自然な欲望を満足させ幸福な生活を追求するという名目の下で通常進行する。問題は,今日の人々の尽きることのない欲望がけっして先天的,自然的なものではなく,発展主義イデオロギーと資本拡大の論理の下で,トランス・ナショナルな生産・販売企業グループとメディア

(20)

や広告会社との結びつきから入念に構築され再生産されたものだというのであり、それは他の生命種の普遍的な自然の欲望と異なるのはもちろん、生態との相対的調和状況下における人類の物質に対する占有、利用とも違うものなのだ。例えば一家に一台の自動車、一人に何着もの毛皮コートやカシミアセーター、毎週のゴルフ、毎年の避暑地でのバカンス等は明らかに現代の消費文化が誘導し企てた産物であって、人間のいわゆる自然属性（仮にそれがあればの話だが）とは直接関係ないものである。こうした不自然な消費欲望が今まさに人類と自然との間の緊張関係を大きく加速させている。その上、往々にして、少数の人間のこうした欲望を満足させるために、多数の人々の飲料水や呼吸する空気、さらに衣、食、住、移動等の基本的かつ正常な需要が逆に大きな制限を受けることになる。これもまた人間の非物質的欲望（情感、尊厳、安全、審美など）がますます軽視され奪われることの直接的原因の一つなのである。ここにおいて、発展主義はまさしく少数の人間の「高級」（奢侈）な欲望で多数の人間の「低級」（基本的）な欲望を抑圧し、社会経済の持続可能な発展を阻むだけでなく、人類に多次元多レベルにわたる「幸福」をただ物質の占有と商品の消費だけに成り下がらせる。したがって、人類の欲望に対する大きな歪曲であり、蹂躪となる。

グローバルな環境—生態の悪化は貧富の差の拡大という状況に伴って発生した。UNDPの『人間開発報告書1999』の統計によれば、全世界のもっとも豊かな国家と最貧国の人口一人当たりの平均収入格差は、1960年の30：1から1990年には60：1に拡大し、1995年には74：1にまで開いた。

ここで指摘しなければならないのは、特定の「貧困」概念は発展主義の文脈の中でのみ出現し、その文脈の中でのみ意味を持つということである。大規模ないわゆる開発にともない、各種の社会と生活の構造が破壊され、多くの地域の人々は

前後して、一方的に利潤の「成長」を追求し、盲目的に集中独占の規模を追求するプロセスに巻き込まれた。土地は徴用され、畑は破壊され、環境は汚染され、人口は流出し、戦争と動乱も以前よりも増えこそすれ減ることはなく、多くの人が無一物になり、正真正銘の赤貧へと没落した。

環境—生態問題について述べる時に「人類」「発展」「近代化」といった類のきわめて抽象的な語がよく用いられる。こうした語句はしばしば現実中の差異を隠蔽する。どんな人が「発展」し「近代化」するのか。どんな人が「発展」と「近代化」から排除されるのか。どの「人類」が環境—生態悪化の害を受け、どの「人類」が環境—生態悪化の過程において利を得るのか。……発展主義に対して反省と総括を加えるためには、さまざまな普遍主義的言説に対する反省と総括を行うことを方法論的前提としなければならないことは明白である。少なくとも常套句を思考の代替とし、言説を事実の代替とする反実践的態度を防止しなければならない。

中国における発展主義

世界総人口の4分の1は中国に存在する。中国は世界でもっとも人口の多い発展途上国である。従って中国における発展と環境—生態の間の矛盾の解決は、全世界にとって重大な意義がある。

発展は不可避の命題であり、民族の長期退勢という深刻な状況における一種の政治的選択である。しかし発展が不可避であることは、金儲けが必然であることを意味するのではない。まして環境や生態の破壊が必然であるのでもない。現在、「中国の特色」が国中上下挙げてのキャッチフレーズになっているが、正真正銘中国の特色と言えるのは、まず人口の多さ、資源不足、技術後進、インフラストラクチャー不足である。それゆえ、中国が米国や西欧の初期の発展モデルを近代化の模範とし、「追いつき追い越す」ための目標とす

ることは不可能だし、そうすべきでもない。欧米の近代化は初期の大規模な資源略奪と生態破壊の基礎の上に成ったものであり、それは同時に対外植民、奴隷売買と植民地主義的拡張及び帝国主義的略奪を土台として造り上げられたものである。本国の人口—資源の矛盾は大量の国外移住によって緩和され、国外の資源は植民地主義的政治—軍事ヘゲモニーと強国経済—文化ヘゲモニーによって制御支配され、中心国家（世界人口の15%を占める）と周縁国家（世界人口の85%を占める）の間における経済—政治—文化の従属関係が近代化の過程において確立されたのである。経済発展が順調な時は、この種の不平等関係は緩和される。しかしながら不景気になると、この種の不平等関係は強化され、激化し、戦争を含む様々な危機を誘発する。このような「外を以て内を疎かにする」「外を以て内を養う」及び「外を以て内を安んずる」近代化の過程は、特殊な歴史条件を利用した特殊な発展経路であり、後発国が完全に反復模倣することは不可能である。

先進国の先進科学技術とその有効さが実証済みの社会管理経験は、いずれも中国が学び吸収すべきものではあるが、中国は国情において欧米と大きく異なるだけでなく、直面する時代も過去の2世紀と同日に論じるわけにはいかない。西洋各国は既に先発の優位をもち、さらに金融、エレクトロニクスなどのハイテク、無汚染産業においてもすでに優位を占めている。しかるに中国は、発展主義モデルの下で郊外化及び周縁化された多くの発展途上国と同様に、廉価で資源を売ることを余儀なくされ、高消費、高汚染の産業に従事することを余儀なくされている。先進国は自国内の木は伐採せず、国外の木を使用し、国内の石油は採掘せずに国外の石油を用いることが可能である。また、発展途上国から得た豊かな利潤により国内の様々な矛盾を解決緩和し、国内において比較的良質な環境—生態を維持することができる。しかし、

既存の世界システムと枠組みの下では、中国はもはや国外移住の方式によって国内の人口—資源の緊張を解くことはできない。逆に、ごく少数のエリートが強国によって選択的に取り込まれるだけである。また、中国は環境—生態コストを国外に転嫁することはできず、逆に斜陽産業の進出と移転を受け入れ、そのために自らの森林、草原、河川、土地を犠牲にしている。さらに、先進国のゴミが不法な企業を通じて中国に運び込まれ続けている。

したがって、中国は持続可能な発展の道を進むしかない。思想革新、制度革新を堅持し、独自の特色ある社会発展の道を進んでいくしかないのである。それは世界文明の多元的発展への貢献でもあり、それこそ欧米現代文明の持つ創造的精神をもっともよく学習したことになるのである。

80年代以降、市場経済体制の回復と建設を核心とする改革開放政策が大きな成果を収め、持続可能な発展の問題も次第に社会の注目を集めるようになり、国家の発展戦略として確定されたことは注目に値する。しかし同時に一部の権力と利益集団とが社会の公正や環境—生態の開発提案を軽視ないしは無視し、更には多国籍資本勢力の略奪的な開発と手を結んで、様々な反社会的、反生態的な悪果を引き起こしていることを忘れてはならない。我々の身近に見られる例はさておき、人跡まれな高原や草原地帯にも、ある大資本グループが開発の触手をのばし、国際市場の買い付けネットワークを浸透させている。現地の腐敗した管理機構の放任と協力によって、トビ、キツネ、チベットカモシカなどが急激に減少し、さらに過度の放牧、とりわけ草原の植生の破壊を代償とするヤギの過度の放牧により、カシミヤの超過利潤が少数の新興グループに流出する一方で、食物連鎖が破壊され、ネズミの大量発生による植生破壊など極めて深刻な環境—生態の災害を招いた。そして広範な民衆の基本的な生存条件を脅かすこのような

開発活動が、改革の政治的成果であり、活性化の理想図として描かれるのである。

これらの現象はしばしば段階論でもって弁護される。段階論に従えば、現在の環境破壊は段階的なものに過ぎず、中国も先進国のように「先に汚染、後に解決」すればよいということになる。確かに、人類の経験と知識には制約があり、破壊とその解決との間には時間差が生ずるのが普通だということは誰でもわかる。だが、「先に汚染、後に解決」はけっして普遍的な法則ではないし、先進国における普遍的な事実などではなおさらでない。多くの先進国における破壊はまったく解決しておらず、高汚染産業を次々と低開発国に移転したりして、ただそのつけを他の国や地域に転嫁しているにすぎないのだ。また、多くの環境—生態の破壊は後からでは回復できないものである。例えば種の絶滅は取り返しのつかないできごとである。さらに、多くの環境—生態破壊は長い年月と莫大な投資によらなければ回復できない。例えば土地の深刻な砂漠化は、数十年あるいはより長期にわたる努力によってしか回復しない。さらに重要なのは、人間は目的であり手段ではないということである。成長は人間の生存のために奉仕するのであり、人間の生存が成長のために奉仕するのではない。略奪的開発が人間の呼吸、飲料水や生命の健康まで脅かし、洪水、旱魃、大気汚染などが多くの人を非業の死に追いやり、我々が文字通り「命がけで発展をめざす」時に、事後解決にどのような意味があるというのか。このような事後解決が破壊から利益を得ていかなる代価も負担しない人間の口から宣揚されても、真剣に扱うに値する理論主張と見なせるだろうか。

代価論も我々がよく耳にする弁護である。この観点によると、環境—生態の破壊は成長のために人類が支払うべき代価であり、大げさに騒ぐまでもない。この見解も一般論としては理解できるものである。代償をまったく支払わずに利益だけを

得ることができると思うほど単純な者はいない。まして中国の長年にわたる衰退は発展の代償（環境—生態を含む）が完全には避けがたいことを決定づけている。しかしながら注意すべきなのは、代価論の濫用がしばしばすべての不公正で不合理な社会体制と役割分担の擁護を利することである。なぜなら、歴史上のあらゆる罪悪と悲劇はほとんどの場合代価論の粉飾の下に合法性を獲得してきたからである。植民地主義も科学技術の普及をもたらした、侵略戦争も工業の成長と雇用の増加を促進した、官僚独裁体制もGNPの上昇を促進した等々。これらはいずれも成果と代価、主流と支流の関係と見なされ、代価論の論理の下に肯定されうる。それゆえ代価論については具体的な分析をしなければならない。問題は成長と発展に代価が伴うのかどうかにあるのではなく、その代価が社会或いは社会のある階層が受け入れ可能な程度を越えていないかにある。そしてその代価は誰が負担するのか。例えば代価論の発明者たちも環境—生態破壊の被害者たちと共に代価を払うのだろうか。事実は明らかである。国連の統計資料によれば、全世界の非中心的国家の住民の大部分は発展主義がもたらした恩恵をまったくかほとんど享受しておらず、中心的な国家の貧困層もまったくかほとんど享受していない。そしてまさにこの世界総人口の85%の人々には、景勝地の別荘もなく、海外へバカンスにでかける航空券もない。中にはかつて生計のよりどころとしていた土地、森林、草原及び河川を失い、環境—生態破壊のもっとも重大な報いを受けている者もいるのだ。

その他、残滓論に言及しないわけにはいかない。この種の見解は環境—生態破壊を含む現在のあらゆる社会問題をいずれも計画経済の残滓であるのみなし、市場化、グローバル化を徹底的に実現し、欧米などの先進社会体制とのリンクを完全に実現しさえすれば、あらゆる問題はたちどころに解決すると考える。このような観点を持った人には、

50年代以降の中国における、「人間は必ず大自然に打ち勝つ」「英米に追いつき追い越せ」といった盲目的な経済行為と経済システムが環境—生態を無視し破壊したことは見えているが、その過程に含まれる「進歩」「成長」「工業化」といった基本的観念が、実は西洋において支配的なイデオロギーと源を一にすることは見えていない。集権的な計画経済システム内の浪費と腐敗の現象、およびその環境—生態に対する深刻な破壊は見えるが、その公私混同が個人の利益の最大化の官界における表れであり、大規模の公私混同がしばしば資本グループとの結託に直接依存し、それを必要条件としていることは無視する。西洋近代文明の産物である初期社会主義理論は階級闘争と社会関係に重きを置き、環境—生態の面については知的盲点が存在した。まさにこの点が西洋の科学主義、理性主義、進歩主義、人類中心主義などのイデオロギーとの親密な関係を鮮明に示す。この点を我々は反省し総括しなければならない。ただし、このような反省と総括は社会の公共性の再構築を道徳的前提と価値基準とするものであり、社会の公共性をかなぐりすてた市場ロマンチズムや市場原理主義とも、また効率を口実にして公正に反対し抑圧する発展主義思想ともまったく無縁のものである。

冷戦終結後、発展主義が席卷した南アジア、アフリカ、南アメリカなどの地域が環境—生態の最も悪化した地域であることは世界が認めるところである。発展主義が最も信奉された90年代は、地球規模でオゾン層破壊、酸性雨増加、海水汚濁、土壌砂漠化が最も深刻な時代でもあった。これは環境—生態問題がけっして古い計画経済システムの残滓であるだけでなく、今後長期にわたって全人類が立ち向かわなければならない課題であることを示している。一国を分析単位とするのではなく世界システムの角度から見ることによるのみ、また一つ二つの時期をのみ対象にするのでは

なく、歴史の長いスパンから見ることによるのみ、環境—生態問題の重大性をはっきりと認識し、様々な環境—生態の困難を取り除いていくことができるのである。それには、中国の社会主義計画経済実践において出現した環境—生態破壊への反省や是正も含まれる。

文学、文化産業、イデオロギー

発展主義イデオロギーがかくも迅速に普及したのには、特殊な歴史的条件があつてのことである。その一つが90年代における文化産業の勃興であり、それに伴う大衆文化の繁栄と拡大である。文化産業は新聞、雑誌、図書、テレビ、映画、広告、流行歌等々を媒体にして、市場経済に対応した文化価値と価値基準を生み出し、人々の伝統的道徳や倫理を迅速に破壊転覆する一方で、発展主義の観念と思想を丸ごと、有無を言わせぬ仕方で人々の思想の深部に注入する。

80年代以降、発展主義の観念を体現する様々な文化商品が大量に売り出され、この数年の文化生産のもっとも顕著な特徴となった。その中で、いわゆる「成功者」のイメージは社会に広汎な影響を与えたのみならず、すでに一種の新しいイデオロギー神話となっている。これは80年代初期の「自分探し」運動やヒューマニズム思潮と緊密に関連しているし、80年代後期の「中産階級」に対する多くの人々の想像や市場化の進展とも緊密な関係がある。もちろんその他に、西洋、香港、台湾のコマーシャルイズムの大量輸入も重要な原動力である。ある批評家の分析によると、成功者の典型的なイメージは一般的に以下のようなものである。中年、多くは男性、小太りで、高学歴、美貌の妻と腕白な子どもがおり、名車を乗り回し、高級ホテルや高級店に出入りし、ヨーロッパ風の住宅に住み、ゴルフをし、大劇場に行く……このようなイメージは多くの人々にとって人生の理想であり、社会の文明進歩の道しるべであるとしばしば見な

(24)

される。問題は、このタイプのイメージがつくられる過程において、成功者の「成功」の原因が常に隠されていることである。結託、詐欺、裏切り、残酷な手段によって暴利をむさぼる醜さ、労苦、孤独、侮辱、搾取を耐え忍んで勝利者となるつらさは顔に浮かぶうつろな微笑として現れるのみである。このタイプのイメージの製造過程で成功という言葉の含義は大きく捻じ曲げられ、人生の価値の多様性は暴力的に単純化された。なぜなら彼らは高消費の富貴、奢侈、豪華さを礼賛するが、いかなる道義感や責任感も持たず、貧困、生態、及び全ての人文的価値への関心とはまったく無関係だからである。彼らは金銭の化身、物質消費の化身、社会等級の化身である。彼らは常に発展途上国における多国籍資本の大衆美学の代理人となる。階級差が激しい高消費の発展途上国においては、外国商品や外国資本への依存が生じやすく、また世界システムの不平等な関係が強化されやすくなるからである。彼らが現実を隠蔽し大衆をミス・リードすることによって、健全な国民的市場経済や文化的成熟に重大な危機をもたらすのは疑う余地がない。

「成功者」の記号と関係の深い一連の流行の流れが他にもある。流行は精神の神となり、国家権力を除いて、もっとも強力に社会をコントロールする力となった。それは一切の「古い」物を格下げし、すべての「新しい」、すなわち「近代的」、「世界的」なものを、人々が追い求め渴望する対象にした。ロック音楽や流行歌はその良し悪しに関わらずみな良いもの、(伝統的)民間音楽、京劇は良し悪しに関わらずみな悪いものである。携帯電話、セーフボックスは役に立つ立たないに関わらず必要で、四合院、自転車は便不便に関わらずみな捨て去らねばならない。このような潮流の背後には外国商品のダンピングと企業による暴利の貪りがある。単一化と強制化が人々の精神の豊かさや個性を扼殺し、文化的に必要な判断力を奪

っていく。それゆえ正真正銘「古くて」腐りきったもの、「美女を侍らせる」、「財神を拝む」、賭麻雀、さらには無知な迷信までが、最「新」の流行であり、近代的で世界的な文化の流行色だと持ち上げられると、伝統をもっとも目の敵にするはずの新派の人々が、ほとんど例外なくそれに殺到してしまうのだ。彼らは文化に対して急進主義的前衛的態度を装うが、実にしばしばもっとも古典的な旧派の文化的退廃を併せ持つのである。それは消費主義文化においては極めて普通に見られる光景である。

文学は文化生産の重要な領域である。90年代以降、優秀な文学作品はけっして少なくないが、全体的に言えば、社会深層の矛盾が堰を切ったように現れ、国際的枠組みが重大な変化を見せる中で、多くの作家は必要な思想的芸術的対応ができていないようだ。目まぐるしく変化する世俗世界の中で価値目標を見失っているようにさえ見える。このような状況下で、回顧と検討に値する傾向が二つある。一つは現実生活を題材にした作品に見られる傾向である。作家は社会下層の人々が生活に対して抱く圧迫感を感じとり、庶民の生活を生き生きと再現するが、時として不公平、不公正な社会秩序を弁護する立場をとる。例えばニュー・リッチの人物は常に救世主のように美化され、その横暴やペテン、売買春、贈収賄などの行為はしばしば許容され羨望さえされる。そして下層の庶民はこうした人物への服従を要求される。この種の「強者救世」、「富者救世」の作品は、読者に絶望の気分を吹き込み、奴隸的服従の道を指示し、発展主義イデオロギーのヘゲモニーを自覚的或いは無自覚的に強化するのである。

もう一つの傾向は個人的世界を表現する作品に見られるものである。作家は社会や政治といった伝統的な大テーマの語りを放棄し、個人の内面世界の探索と個の価値の確立へと転向する。形式面では常にモダニズムの奇矯と奔放を特徴とする。

だが、実際にはこれらの作品の多くはしばしば人間性論へとずれ込み、原理主義的な人間性論でもって「人間」の歴史性（人間の主体がいかにして構築されたかの歴史過程）を否定する。あたかも人間の本質は欲望であり、欲望は自然で本然的なもので、だから神聖なものであると言うかのようである。彼らは現実の生活においていわゆる人間性が形成されるために必要な全ての文化的プロセスも、全ての社会的関係も完全に覆い隠し、人間は他者と無縁な独立した存在であり、その人間性はいったん形成されれば変わることはないのだという人間性神話を作り出す。それは発展主義の哲学的論理に通じるものである。これらの作品中には濃厚な消費主義の色彩を帯びたものもある。時に非現実的でとりとめがなく、何が何だか分からないが、奢侈で享樂的な生活への憧れがしばしば露骨に現れる。極端な利己主義的色彩を濃厚に示す作品は、他人や社会に対する無関心をまき散らし、弱肉強食のジャングルの法則がはしなくも行間に現れる。金銭が人生の意義であり、美女と美酒が感覚の源泉である。社会が分化しはじめているのに乗じて急いで一儲けせよ、それがこれらの作品の読者に対する隠れたメッセージである。この種の作品が文学における、発展主義イデオロギーの天然の盟友であることは言うまでもなく、ほとんど大衆消費ガイドであり、社会で生き抜くための指南書だと言ってよい。それゆえそれらの作品は時に前衛を装うが、馴れ合いと「私」の大安売りがあふれるのみで、流行のファーストフード文化の低俗性が日に日にあらわになるのを避けようもない。

結び

新しい思想の革新の波がこの世紀の変わり目に近づいている。環境—生態の保護は、現在すでに社会の公共性を再構築するための切実な現実的課題であり重要な思想の出発点となっており、最も

社会動員力のある行動の旗印の一つになっている。しかしこの問題が新世紀の直面する社会問題のすべてではけっしてないし、この問題自体に対しても開放された多元的思考空間が用意されるべきである。環境—生態の基準が国際貿易において相手に打ち勝つための手段となりうること、自然を崇拜しながら親に虐待を加える人間がいるという奇妙な世相、過激な「環境保護」主義者による緑色テロリズムの爪跡……、こうしたことを踏まえて、南山座談会の参加者たちは問題の複雑性を深く認識し、この座談会が今後より多角的で多面的な思考と批評へと通じ、さらには成熟した健全な社会实践につながるよう希望するものである。

それを実現するには、80年代以来のある種の固定観念を超越することがきわめて重要である。人類／自然、市場／政府、社会／国家、近代／伝統、資本主義／社会主義、成長／貧困、発展／環境等の二項対立の単純なモデルは一見強力な解釈機能を持つように見え、各種のメディアにおける流行の言説となっており、それが人々が歴史と現実に対して正確な判断をするのを妨げている。我々が中国の問題に本気で立ち向かおうとするなら、教条と迷信に化しつつあるこうした固定観念から解放され、個人の様々な既得利益の地位的制約から解放されなければならない。中国は特殊な国情ゆえに、近代化の改革と建設の過程できわめて大きな環境—生態の圧力を受けるよう運命づけられている。それならば中国の知識界と批評界も、この視角から思想と文化を革新できるというのは大いにありうることである。それはもしかしたら正に一種の幸運なのかもしれない。